

■ ドルは一定の出直りへ！？

前回更新分の本欄で「黒田日銀が自分からわざわざ円高のタネを振り撒くはずもない」と述べたが、実のところ先週の世界経済フォーラム年次総会（ダボス会議）で黒田総裁は少々してかしてしまっただけで、2%の物価目標に関する話題であり、総裁にはなかったに違いないが、結果的には“不用意”な発言となってしまった。

後に慌てて日銀が火消しに走ったところから、今のところ日銀に金融緩和規模縮小の考えがないことは明らかだが、市場に余計な円買いの“口実”を提供してしまったことは事実。無論、ことの本质を考えれば、ここで仕掛けられた円買いが巻き戻されるのは時間の問題となる。

また、前回更新分の本欄ではムニューシン米財務長官によるドル安容認ともとれる発言について「ECBは全面的に抵抗しなければならないはず」などと述べた。その実、先週25日にECBのドラギ総裁はムニューシン発言について「国際通貨基金（IMF）加盟国間の合意に反している」と強烈に非難することとなった。今回のドラギ氏の言動は「いかにECBが足下のユーロ高を憂い、一段のユーロ高をけん制したがっているか」、そして「ムニューシン発言に対してどれだけ怒り心頭であるか」ということを実に物語っていたと言える。

周知のとおり、それに相前後してトランプ米大統領が「強いドル希望」を連発したことでお茶を濁す格好となったのだが、とにかく数々の“不用意”な発言で一時的にも無用にドルが売り叩かれることとなった点を踏まえたうえで、今後のドルの行方をじっくり考えたい。

まず一つの重要なトピックとして、昨日（31日）のドル/円のNY終値、つまり1月の月足・終値について確認しておきたい。月足チャート上で確認すると、1月の終値は結局のところ62カ月線によってガッチリと下値を支えられる格好となった。

思えば、ブレグジット・ショックの禍が世界中を駆け巡った2016年6月から同年11月までのドル/円の月足は長らく62カ月線に下値を支えられ続け、11月の米大統領選後に急上昇することとなったのである。2月の62カ月線は109.34円あたりまで水準を切り上げてきていることを再確認しつつ、今月も同線が下値サポート役として機能し続けるか注目しておきたい。

また、ユーロ/ドルが先週25日に一時1.2537ドルまで上値を伸ばしたと超え尾で上げ一服となっている点にも注目しておきたい。下図にも見るように、まずユーロ/ドルはすでに一目均衡表の月足「雲」上限が位置する水準まで値を戻してきており、2014年3-5月あたりもそうであったように、月足「雲」上限が強烈な上値抵抗として立ちはだかる可能性というものを一つに考慮しておきたい。



また、2008年7月高値と以降の主要な高値を結ぶ超長期レジスタンスラインが徐々に上値抵抗として意識されやすい水準まで降りてきたことにも要注目。さらに、2008年7月高値から2017年1月安値までの下げに対する38.2%戻しの水準（＝1.2517ドル）にはすでに一旦到達している。昨日（31日）公表されたFOMC声明を見るに、FRBは市場の想定以上にタカ派と見られる。当面は一定のドル出直りもあっておかしくない。（02月01日 11:25）